

## 青島鹵獲書籍について:現在の所蔵を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/3858">http://hdl.handle.net/2297/3858</a>

## 青島鹵獲書籍について<sup>1</sup>

### — 現在の所蔵を中心に —

志村 恵

#### はじめに

第一次世界大戦における日独戦争のあと日本に送られたのは約 4,700 名の俘虜<sup>2</sup>だけではなかった。さまざまな「戦利品」や膨大な資料も日本に送られた。その中には、膠州図書館 (Kiautschou-Bibliothek)、徳華高等学堂<sup>3</sup> (Deutsch-chinesische Hochschule)、膠州総督府 (Landesverwaltung von Kiautschou)あるいは青島裁判所 (Kaiserliches Gericht in Tsingtau) などが所蔵していた約 27,380 冊<sup>4</sup>の書籍も含まれていた。このいわゆる「青島鹵獲書籍」については、すでに 1980 年代に安達将孝氏の報告<sup>5</sup>があったが、本格的に注目を集めるようになったのは<sup>6</sup>、論者が金沢大学所蔵の「青島文庫」について報告して以来である<sup>7</sup>。また、各機関が所蔵している書籍の目録に関しては、金沢大学のほか、信州大学および山形大学の目録が公刊されている<sup>8</sup>。

<sup>1</sup> 本研究は、科学研究費補助金：基盤研究 (B) 17320091「青島鹵獲書籍」の復元と清末民国初における独英の対中国文化接触に関する比較研究 (代表：持井康孝) の助成を受けたものである。

<sup>2</sup> 俘虜の明細なリストについては、瀬戸武彦氏の労作を見よ。『青島 (チンタオ) をめぐるドイツと日本 (4) 独軍俘虜概要』「高知大学学術研究報告」50 人文科学編 (2001) 57-151。『青島 (チンタオ) をめぐるドイツと日本 (5) 独軍俘虜概要 (2)』「高知大学学術研究報告」52 人文科学編 (2003) 25-155。また、俘虜の日本での実態等については、同氏の『青島から来た兵士たち —第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』同学社、2006 年、を参照。

<sup>3</sup> „Deutsch-chinesische Hochschule“には「独中大学校」などの訳語もあるが、本論では旧日本軍が使用した「徳華高等学堂」を使用する。

<sup>4</sup> この数は、青島守備軍参謀部『鹵獲書籍目録訂正表 (謄写目録及欧文目録)』(金沢大学図書館蔵)による (一) 官有書籍 洋書 9,523 冊、漢書 1,479 冊、(二) 徳華高等学堂蔵書 洋書 1,341 冊、漢書 5,103 冊、(三) ウェルヘルムコーン叢書 洋書 326 冊、(四) 膠州図書館蔵書 洋書 9,608 冊、合計 27,380 冊)。しかし、実際に送付された書籍数は現時点では不明である。

<sup>5</sup> 安達将孝『第一、二次世界大戦中における日本軍接収図書』「図書館界」33.2(1981.7), 68-75。

<sup>6</sup> 渡邊武房『鹵獲図書 12 冊 (福島図書館研究所所蔵資料紹介シリーズ その1)』「福島図書館研究所通信」(創刊号) 2004 年、7-12.; 森孝明『愛媛における日独関係史 「青島守備軍司令部」寄贈ドイツ図書と旧制松山高等学校 (前)』「愛媛大学法文学部論集人文科学編」17 (2004 年) 一～二四.; 『愛媛における日独関係史 「青島守備軍司令部」寄贈ドイツ図書と旧制松山高等学校 (後)』「愛媛大学法文学部論集人文科学編」18 (2005 年) 一～二三.; 奥村淳『山形大学図書館に存する青島鹵獲図書について —その比較文化的考察—』「山形大学紀要 (人文科学)」第 16 巻第 1 号 (2006 年) 115-152。

<sup>7</sup> 『金沢大学中央図書館所蔵「青島文庫」蔵書目録 (1) (2)』「金沢大学文学部論集」(言語・文学篇) 20 (2000 年) 129-151、21 (2001 年) 115-121.; 『日独戦争と青島鹵獲書籍』「独文研究室報」(金沢大学独文学研究会) 18 (2002 年) 17-32。

<sup>8</sup> 「旧松本高等学校ドイツ語図書Ⅲ —青島守備軍司令部寄贈図書—」In: 井出万秀・須田明日香 (編)『旧制松本高等学校ドイツ語図書目録』旧制高等学校記念館、2001 年、128-141.;

本論は、「日独戦争と青島鹵獲書籍」以降に論者が得た知見をまとめるとともに、同論において犯した間違いや不十分な点を修正・補足するものである。ただし、紙面の関係上、本論では上述した4つの鹵獲先について概略した上で、日本各地の諸機関における現在の所蔵状況をまとめるにとどめたい。なお、所蔵状況についてはなお調査中であり、したがって本論は中間報告的な性質を帯びる。

## 1. 鹵獲先の主な図書館・図書室

旧日本軍によって鹵獲された書籍の元々の所蔵場所・所有者は多岐にわたるが、本論では規模の上からも中心的であった膠州図書館、徳華高等学堂、総督府図書館、裁判所図書館の4つに絞ってまとめる。

### 1. 1. 膠州図書館

ドイツは1897年11月1日に起きた二名のドイツ人宣教師の殺害事件を口実として、11月14日、ドイツ東洋艦隊を膠州湾に侵入させた。ドイツ軍は短時間で青島に無血上陸し、同地を占拠した。翌年3月6日、清はドイツの要求に屈し、ドイツとの間に独清条約を結んだ。これによってドイツは、青島を中心とした膠州湾地域551平方キロメートルを99年間租借する権利と、青島から済南までの鉄道（全長430キロメートル）を得た。また、張店から博山までの鉄道敷設権（40キロメートル）と沿線15キロメートルの採鉱権をも手にした。

膠州は、1898年4月27日の勅令により植民地（Schutzgebiet）と位置づけられ、ドイツは本格的な植民地経営を目指し、青島の市街地建設に臨んだ。驚くことにその1898年には、すでにベルリンで膠州図書館委員会（Kiautschou-Bibliothek-Komitee）が設立され、青島に公立図書館を設置すべく募金活動が始められている。フライブルクのドイツ公文書館軍事分館（Bundesarchiv-Militärarchiv）に所蔵されている呼びかけ文および添書<sup>9</sup>によると、この委員会は、ディートリヒ＝ライマー書店のあったWilhelm-Straße 29番地（Berlin SW）を連絡先とし、元海軍大佐のMensing<sup>10</sup>、ディートリヒ＝ライマー書店のErnst Vohsen、„Berliner Neueste Nachrichten“の編集人Hugo Jacobiの三名が呼びかけ人として名を連ねている。委員会の目的は、その時点で4000名に達していたドイツ守備軍の若者に、図書および快適な図書室を寄付しようというものであった。そして、当時の青島指令官ローゼンダール大佐が図書室の設立とその後の管理について同意していることを明記している。「膠州に駐在するわれらの船員と水兵のために」と題した呼びかけ文によれば、風習も世界観も違う、そして言葉も通じない中国にあってさまざまな苦勞をして

---

奥村淳：前掲論文 144-152.

<sup>9</sup> Bundesarchiv/Militärarchiv, RM2/1836, Bl. 65/66.

<sup>10</sup> Adolf Mensing, Berliner Adressbuch 1903. S. 1144. 参照。

いるドイツの若者たちが、日々の仕事の後で、ゆったりと気晴らしをしたり休息をとったりするために、そしてドイツ人の遺伝病ともいえるホームシックを防ぐために、あるいはまた、故郷の精神生活に触れる機会を得るために、図書館 (Volksbibliothek) を作るとした。委員会は現金での寄付を呼びかけるとともに、出版関係者に対してはこの目的にふさわしい書籍の現物による寄付を要請している。そして、現物で寄付する場合の書籍は海上輸送に耐える荷造りをして、「膠州図書館委員会」との上書きをしたうえで、ハンブルクの運送会社 (Mathies & Co. Gimm 27) に直接送るよう要請している。

こうして集められた書籍と寄付によって膠州図書館は1898年に成立したのであるが<sup>11</sup>、開館の具体的な月日は不明である。他方、その所在地は<sup>12</sup>、1906年の総督府の完成まではIrenestraßeの西から数えて二つ目の建物であったが<sup>13</sup>、総督府が完成して以来はその一階西翼に位置していた<sup>14</sup>。1906年8月9日付けの„Tsingtauer Neueste Nachrichten“<sup>15</sup>によれば、膠州図書館には「天井の高い、明るく、風通しのよい閲覧室に、電気照明、セントラル・ヒーティングおよび快適な調度品が完備」されていた。また、図書館は総督府の他の部屋から独立しており、入り口も別個に設置されていたので、「利用者は図書館および閲覧室を何ら邪魔されずに利用」できたという。膠州図書館の利用は、「図書館規則」<sup>16</sup>によれば、有料・会員制であり、陸海軍の将校や行政職のものは一月1ドル、それ以外の一般のものは1.5ドルであった。ただし伍長以下の兵卒は無料であった。

蔵書は、軽い文学的な読みものが中心であったが、それでも当時のドイツの高い学術水準を反映した各分野の専門書ないしは入門書が相当数見受けられ<sup>17</sup>、「同時代のドイツの知的財産の総体を俯瞰し、あらゆる分野の学問へのアプローチを保証するもの」<sup>18</sup>であった

<sup>11</sup> Minerva. Jahrbuch der gelehrten Welt. Berlin. 1912/13; 1913/14. Minervaについては、持井康孝氏のご教示による。

<sup>12</sup> 拙論『日独戦争と青島函獲書籍』では、「万年兵舎、すなわちビスマルク兵舎に設置されていたものと思われる」(26頁)と推論したが、松本剛氏の論考や瀬戸武彦氏のご指摘(論者への私信)の通り、これは間違いであり、本論において訂正したい。松本剛『略奪した文化 戦争と図書』岩波書店、1993年、43頁。

<sup>13</sup> Friedrich Behme und Maximilian Krieger: Führer durch Tsingtau und Umgebung. Wolfenbüttel 1904 (2. Auflage), S. 46. なお、英語版の第4版では、「イレネ通りの、(フリードリヒ通りから数えて)西へ向かって二軒目の建物」となっている。Friedrich Behme and Maximilian Krieger: Guide to Tsingtau and its Surroundings. Wolfenbüttel 1910 (IV Edition), p. 42.

<sup>14</sup> 同, p. 46.

<sup>15</sup> Tsingtauer Neueste Nachrichten. 9. August 1906, S.2.

<sup>16</sup> 細かい利用規定については、Bücherverzeichnis der Kiautschou-Bibliothek. Tsingtau 1911. 収録の「図書館規則」、「閲覧室規則」、および校條善夫『収容所図書館を膠州図書館の規則でイメージする』「青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究」2(2004年)87-94.を参照せよ。

<sup>17</sup> Bücherverzeichnis der Kiautschou-Bibliothek. を参照せよ。

<sup>18</sup> Klaus Mühlhahn: Qingdao (Tsingtau) – Ein Zentrum deutscher Kultur in China? ([http://www.dhm.de/ausstellungen/tsingtau/katalog/auf1\\_9.htm](http://www.dhm.de/ausstellungen/tsingtau/katalog/auf1_9.htm))

という。蔵書数は、1912・13年の時点で11,450冊<sup>19</sup>、1913・14年の時点で11,700冊<sup>20</sup>であった。また、1904年以来専属の司書が置かれ（Prof. Dr. Doenitz）<sup>21</sup>、利用もドイツ人だけではなく中国人にさえ開放されていたという<sup>22</sup>。

### 1. 2. 徳華高等学堂

徳華高等学堂（Deutsch-chinesische Hochschule）は、ドイツの文化ミッションの中心プロジェクトとして、1909年10月25日に設立された<sup>23</sup>。当初は54名の学生が入学し、最終的には、法学部、自然科学・工学部、農学部、医学部の四つの学部で約400名の学生が学んでいた。初代の学長は、カイパー（Georg Keiper）であった。1912年の時点で、学堂では26名のドイツ人教員と6名の中国人教員が教壇に立っていた。また、学堂には図書館のほか、実験室、博物館、農業用の演習園があった<sup>24</sup>。図書館には、1913・14年の時点で、洋書約15,000冊と漢書約4,600冊が所蔵され、図書館長はH.Wirtz教授、助手はLessingであった<sup>25</sup>。

### 1. 3. 裁判所図書室

租借地には、1898年以来、第一審を管轄する帝国裁判所（Kaiserliches Gericht）が、さらに1906年以降は、第二審を管轄する上級裁判所（Kaiserliches Obergericht）が置かれていた<sup>26</sup>。裁判所図書館は法律関係の実務図書館であり、1913・14年の時点で約2,000冊の書籍を所蔵していた。管理は書記官のタベルト（Tabbert）<sup>27</sup>があたっていた<sup>28</sup>。

---

<sup>19</sup> Minerva 1912/13, S.1382.

<sup>20</sup> Minerva 1913/14, S.1436. なお、『函獲書籍目録訂正表（謄写目録及欧文目録）』によれば、膠州図書館由来の函獲書籍は合計9,608冊であることから、欠本および未返却本が約2,100冊あったことになる。

<sup>21</sup> Minerva 1912/13, S.1382. ; Minerva 1913/14, S.1436.

<sup>22</sup> Klaus Mühlhahn: 前掲論文。

<sup>23</sup> Horst Gründer: Geschichte der deutschen Kolonien. Paderborn u. a. (UTB) 4. verbesserte und ergänzte Auflage 2000, S. 203.

<sup>24</sup> Klaus Mühlhahn: Der Alltag an der Hochschule in Qindao: Deutsche, Chinesen und die universitäre Bildung. In: Hermann J. Hiery und Hans-Martin Hinz (Hrsg.): Alltagsleben und Kulturaustausch: Deutsche und Chinesen in Tsingtau 1897-1914. Wolfratshausen 1999, S. 186.

<sup>25</sup> Minerva 1913/14, S.1436.

<sup>26</sup> A. Seidel: Deutschlands Kolonien. Koloniales Lesebuch für Schule und Haus. Beschreibung der deutschen Schutzgebiete nebst einer Auswahl aus der kolonialen Literatur. Dritte vermehrte Auflage. Leipzig 1913, S. 176. および、Bernd Leupold: Chinesen unter deutschem Recht: Das Justizwesen im Schutzgebiet.

([http://www.dhm.de/ausstellungen/tsingtau/katalog/auf1\\_12.htm](http://www.dhm.de/ausstellungen/tsingtau/katalog/auf1_12.htm)) 参照。

<sup>27</sup> おそらく Otto Tabbert。瀬戸武彦『青島（チンタオ）をめぐるドイツと日本（4）独軍俘虜概要』127頁。また、Hans-Joachim Schmidt氏のホームページ「Die Verteidiger von Tsingtau und ihre Gefangenschaft in Japan (1914 bis 1920)」も参照のこと

(<http://www.tsingtau.info/index.html?listen/datenbank.htm>)。

#### 1. 4. 総督府図書室

総督府図書室は、ベルリン在住の弁護士であり作家でもあったWilli Bohnが寄贈したドイツ語および中国語書籍を元として作られたものであった。総督府の職員用ではあるが、学術目的のためであれば、部外者の貸し出しも可能であった。蔵書数は1912・13年の時点で1,330冊<sup>29</sup>、1913・14年の時点で1,410冊<sup>30</sup>であった。その中には、税関の出版物120点400冊、約60点の地図、さらに300冊の雑誌も含まれていた<sup>31</sup>。また、管理および新規購入は総督府の責任でなされ、1913・14年の時点では試補見習いのティロ(Thilo)<sup>32</sup>がその任に当たっていた<sup>33</sup>。

#### 2. 現在の所蔵状況

論者は、「函獲書籍寄贈分配表」<sup>34</sup>、「同修正案」<sup>35</sup>、『膠州図書館蔵書目録 補遺』<sup>36</sup>に基づきながら旧日本軍が膠州・青島から函獲してきた書籍の所蔵調査を行ってきたが、現在、所蔵が確認されているのは以下の25機関である。北海道大学、東北大学、山形大学、新潟大学、埼玉大学、茨城大学、東京大学、一橋大学、東京外国語大学、信州大学、金沢大学、京都大学、愛媛大学、山口大学、九州大学、佐賀大学、防衛大学校、海上保安大学校、法務省図書館、外務省図書館、海上自衛隊第一術科学校、埼玉県立浦和図書館、埼玉県立熊谷図書館、昭和館図書館および福島図書館研究所。

一方、配布計画があったにもかかわらず<sup>37</sup>、現在、所蔵が確認できていない機関もある。熊本大学(第五高等学校)、岡山大学(第六高等学校)、鹿児島大学(第七高等学校)、名古屋大学(第八高等学校)、総務省(拓殖省など)、国立国会図書館(帝国図書館)などがそ

---

<sup>28</sup> Minerva 1913/14, S.1436.

<sup>29</sup> Minerva 1912/13, S.1382.

<sup>30</sup> Minerva 1913/14, S.1436.

<sup>31</sup> Minerva 1912/13, S.1382.; Minerva 1913/14, S.1436.

<sup>32</sup> おそらくFriedrich Thilo. 瀬戸武彦：前掲論文、128頁。

<sup>33</sup> Minerva 1913/14, S.1436.

<sup>34</sup> 防衛庁防衛研究所所蔵「大正八年以降青島函獲書類ニ関スル件」(陸軍省 日独戦役 T8～1/66)に綴られている「青参第67号 函獲図書目録ノ送付及処分ニ関スル件照会」に添付された「函獲書籍寄贈分配表」(1920年2月)

<sup>35</sup> 「大正八年以降青島函獲書類ニ関スル件」に綴られている「八年九年欧第一六〇三 四八号 函獲書籍分配ニ関スル件」で通牒案として起案され、「欧発第46号」として1922年2月20日付けで発信された第二修正案(一、水戸、山形、佐賀高等学校ニ対シ、他ノ応答学校ト同一程度ニ分配スルコト 二、別紙其一ヨリ其十三ハ、陸軍省、参謀本部、教育総監部、陸軍技術本部、東京砲兵工廠、陸軍被服本廠、陸軍糧秣本廠、千住製絨所、陸軍工兵学校、陸軍士官学校、東京陸軍幼年学校、陸軍経理学校、陸軍軍医学校ニ夫々分配スルコト)。森孝明『愛媛における日独関係史「青島守備軍司令部」寄贈ドイツ図書と旧制松山高高等学校(前)』一九頁以下。

<sup>36</sup> 青島守備軍参謀部『膠州図書館蔵書目録 補遺』(金沢大学図書館蔵)。

<sup>37</sup> 分配計画には修正が加えられたが、その修正案がどの程度忠実に実行されたか、あるいはその修正案との関係で「函獲書籍寄贈分配表」がどの程度実行されたのかなどについては論を改めたい。

れである。熊本大学（第五高等学校）と岡山大学（第六高等学校）に関しては、それぞれ五校文庫、六校文庫として、旧制高等学校の蔵書をそのまま引継いだ上保管しているが、論者の調査によれば、他の洋書類は現存するものの青島鹵獲書籍は発見することはできなかった。第八高等学校（名古屋大学）および第七高等学校（鹿児島大学）の図書は、第二次世界大戦中の空襲や第二次世界大戦後の火災によって消失したとされているので、明言することはできないが、第五高等学校から第八高等学校までの4校に関しては、鹵獲書籍が配布されなかった可能性も否定できない。しかし、この点については、なおも調査が必要である。

#### <北海道大学>

前述の「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、北海道大学の前身である北海道農科大学には、公官庁所蔵洋書 69 冊、膠州図書館所蔵洋書 50 冊、合計 119 冊が寄贈される予定になっていた。また、2000 年に行った予備調査に対する回答では、現存する「図書受け入れ簿」に、1922 年 10 月 5 日付で、304 冊が青島守備軍司令部から寄贈された旨記載されている。しかし、それらの書籍は混配されているため、現在のところ何冊残っているか未確認である。

#### <東北大学>

東北大学の前身である東北理科大学には、「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書 196 冊、膠州図書館洋書 406 冊、計 602 冊が、同じく第二高等学校には、公官庁洋書 71 冊、膠州図書館洋書 272 冊、計 343 冊が分配される予定であった。2000 年に行った予備調査に対する回答では、東北大学図書館には、青島守備軍によって添付された『鹵獲書籍及図面目録』（東北理科大学校宛）が残っており、その表紙には、「官有図書七四冊、第二追加参冊、徳華学堂洋書八二冊、膠州図書二五〇冊」と記載されている。これらの合計 409 冊のうち現存しているのは約 280 冊とされているが、混配されているので、正確なところはまだ不明である。また、登録年月日に関しては、1922 年（大正 11 年）2 月 23 日のもの（目録カードによる）、1928 年（昭和 3 年）3 月 31 日のもの（受け入れ印による）がある。一方、第二高等学校分は一箇所にまとめられて、323 冊所蔵されている。

#### <山形大学>

山形大学の前身である山形高等学校に関しては、「鹵獲書籍寄贈分配表修正案」に「他ノ高等学校ト同一程度ノ配分」をするよう指示されているが、具体的に何冊分配される予定だったかは不明である。ただし、『膠州図書館目録 補遺』<sup>38</sup>には、11 冊分配された旨が記載されている。最近調査された奥村淳氏によれば、山形大学図書館に現存しているも

---

<sup>38</sup> 青島守備軍参謀部『膠州図書館目録 補遺』

のは 108 冊であるとのことである<sup>39</sup>。また、「寄贈書籍台帳」、「洋書登録台帳」、「洋書分類台帳」、「(洋書) 図書出納簿」も残っており<sup>40</sup>、受け入れの年月日等も確認できる状況のようである。一番早い登録は 1947 年(昭和 22 年)6 月 23 日、一番遅い登録は 1948 年(昭和 23 年)3 月 20 日という。これは奥村氏が推察されるように大学設置基準を満たすための「国立大学化の一環」<sup>41</sup>で図書の登録を行ったからだと思われる。なお、『膠州図書館目録 補遺』で挙げられていた 11 冊のうちの 3 冊が現在「福島図書研究所」に所蔵されている。これについては、〈福島図書研究所〉の項を参照されたい。

#### <新潟大学>

新潟大学の前身である新潟高等学校には、「函獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書 73 冊、膠州図書館洋書 416 冊、計 489 冊が寄贈される予定になっていた。新潟大学図書館にも、青島守備軍によって添付された『函獲書籍及図面目録』(新潟高等学校宛)が残っており、その表紙には、「官有洋書四六冊、膠州洋書三〇一冊、合計三四七冊」と記載されている。新潟高等学校の図書受入簿によると、1922 年(大正 12 年)9 月に 328 冊が寄贈されたことになっており、これを引き継いだ新潟大学人文学部の「図書原簿」によると、326 冊が 1956 年(昭和 31 年)12 月 21 日付けで保管転換されている。現在では、328 冊が一般図書と一緒に配架されているが、請求番号が同一なため、結果的にまとまったかたちになっている。

#### <埼玉大学>

埼玉大学の場合は事情が幾分複雑である。すなわち、埼玉大学の前身である浦和高等学校はその設立が 1921 年(大正 10 年)11 月であるので、1920 年(大正 9 年)2 月に作られた当初の青島函獲書籍分配計画の対象外であった。また、実際にも分配されていない。しかし、第二次世界大戦終戦直後の 1945 年 10 月 29・30 日、朝霞にあった陸軍予科士官学校の蔵書が、アメリカ軍の接収を避けるため、近くにあった埼玉県立図書館にトラックで運び込まれたという<sup>42</sup>。また、「浦和市内の小・中学校の生徒が動員され、徒歩で朝霞からリュックにつめて運ばれた図書は、玄関西側の大部屋の床に山積みされた」<sup>43</sup>という証言もある。その後、アメリカ進駐軍によって、日本軍が戦争中に中国から持ち出した書籍を中国に返却するとして、運び出されたものも多数あった。さらに 1949 年、埼玉大学が国立大学になる際に県立図書館から埼玉大学に相当数の書籍が移された。これらの書籍は、現在は、「借用図書」として書庫に混配されている。蔵書印から推察すると、これらは、

<sup>39</sup> 奥村淳『山形大学図書館に存する青島函獲書籍について —其比較文化的考察—』115 頁。

<sup>40</sup> 奥村：同論文、127 頁以下。

<sup>41</sup> 奥村：同論文、132 頁。

<sup>42</sup> 『埼玉県立浦和図書館 50 年誌』埼玉県立浦和図書館、1972 年、149 頁(年表)。

<sup>43</sup> 佐波義正：「県立図書館とわたし」In:『埼玉県立浦和図書館 50 年誌』104 頁。

まず陸軍士官学校、陸軍中央幼年学校および陸軍予科士官学校に分配されたもので、後に陸軍予科士官学校に引き継がれた書籍と思われる。現在 51 冊の函獲書籍を確認しているが、総数は不明である。

#### <埼玉県立浦和図書館>

埼玉県立浦和図書館の前身であった埼玉県立図書館には、前項のように朝霞にあった陸軍予科士官学校の蔵書が大量に持ち込まれた。1949 年には、そのうちの相当数が埼玉大学に「借用」された。さらに、2003 年には県立図書館の統廃合があり、洋書部門は主に熊谷図書館が受け持つことになり、陸軍予科士官学校の旧蔵書の相当数が熊谷図書館に移管された。現在浦和図書館に残されている函獲書籍は 140 冊である。それらの書籍の最初の被分配機関は、蔵書印から推察すると、埼玉大学同様、陸軍士官学校、陸軍予科士官学校、陸軍中央幼年学校と思われる。

#### <埼玉県立熊谷図書館>

前項のように、2003 年の埼玉県立図書館の統廃合により洋書部門の担当になった熊谷図書館には、現在、95 冊の函獲書籍があるが、これらの書籍の最初の被分配機関は、蔵書印から推察すると、埼玉大学および浦和図書館同様、陸軍士官学校、陸軍予科士官学校、陸軍中央幼年学校と思われる。

#### <茨城大学>

茨城大学の前身である水戸高等学校は、1920 年（大正 9 年）4 月に設立された。当初の「函獲書籍寄贈分配表」には分配計画がなかったが、「同修正案」において、山形高等学校、佐賀高等学校と同様に、「他ノ高等学校ト同一程度ノ配分」をするよう指示されている。具体的に何冊が配布予定であったのかは不明であるが、『膠州図書館目録 補遺』には、11 点 12 冊（1 点重複本）のタイトルが記されている。受け入れ簿等は現存していないが、現在 21 冊が確認されている（混配）。これらの登録年月日は、1922 年（大正 11 年）8 月 30 日および 1927 年（昭和 2 年）1 月 26 日である。

#### <東京大学>

東京大学の前身である東京帝国大学には、「函獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書 357 冊、膠州図書館洋書 963 冊、ウィルヘルムコーン叢書 324 冊、徳華高等学堂漢書 2,850 冊、徳華高等学堂洋書 20 冊、計 4,514 冊が寄贈される予定になっていた。また第一高等学校には、公官庁洋書 103 冊、膠州図書館洋書 243 冊、計 346 冊が寄贈される予定になっていた。2000 年に行った予備調査に対する回答では、「図書原簿」に 1925 年（大正 14 年）10 月 30 日付けで 585 冊が登録されたことになっている。これらの書籍は東京帝国

大学に分配された膨大な書籍の一部と思われるが、混配されており、現在のところ何冊残っているかは未確認である。また、同大学には、陸軍軍医学校の旧蔵書や海軍関係の旧蔵書が移管されたとされているので<sup>44</sup>、その意味でも今後の調査が待たれるところである。

#### <一橋大学>

一橋大学の事情も複雑である。一橋大学の前身である東京産業大学には青島鹵獲書籍の分配の計画はなかった。しかし、同大学所蔵の「旧陸軍経理学校図書始末」<sup>45</sup>によれば、第二次世界大戦終戦直後、陸軍経理学校図書館に放置・散乱していた図書の惨状を見かねた村松祐次氏のイニシアティブで、1945年10月、陸軍経理学校校長古野好武と東京産業大学長高瀬荘太郎の間で寄贈の覚書が交わされ、凡そ40,000冊の図書が東京産業大学に寄贈されたという。その後、1954年には保安庁および陸上自衛隊業務学校より図書返却の要請があり、1954年から1963年にかけて合計10,409冊の書籍が返却された。また、1955年には、会計検査院の指摘により、未登録書籍の整理が行われた。その後の1967年時点でのまとめによると、陸軍経理学校からの蔵書は、和書が1,074冊、漢書（和綴日本含む）が10,961冊、洋書が3,175冊、合計15,210冊である。なお、その後1966年には防衛大学校に和書392冊が寄贈されている。

これらの書籍は混配されており、旧ドイツ側の背表紙ラベルも陸軍経理学校の背表紙ラベルもはがされているため、確認作業が難しく、現在のところ陸軍関係機関に対する「図書分配表（鹵獲書籍及図面目録ノ分）」<sup>46</sup>よりたどった3冊の確認にとどまっている。なおも鹵獲書籍を確認する作業が必要である。

#### <東京外国語大学>

東京外国語大学の前身である東京外国語学校および同学校ゲルマニア図書館には、「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書335冊、膠州図書館洋書331冊、計666冊が配布される計画になっていた。「図書出納簿」には1923年（大正12年）3月18日付けで221冊が青島守備軍陸軍参謀本部より寄贈との記録がある。記録上はそのうちの6冊が火災で焼失したことになっているが、現在243冊が確認されている（混配）<sup>47</sup>。

<sup>44</sup> 大東亜戦争研究会のホームページによる。

(<http://www.geocities.co.jp/WallStreet/2687/sankosiryo/sanko10.html>)

<sup>45</sup> 一橋大学図書館蔵「旧陸軍経理学校図書始末」（一橋大学附属図書館古書類保存箱№7 資料番号129）。

<sup>46</sup> 防衛庁防衛研究所蔵「大正八年以降青島鹵獲書類ニ関スル件」に収録。

<sup>47</sup> 論者は図書出納簿を頼りに、その他に6冊中国書を見つけているが、青島守備軍の寄贈印やドイツ側のスタンプ印等の証拠がないため、青島鹵獲書籍と言い切れるか難しいところである。

#### <信州大学>

信州大学の前身である松本高等学校には、「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書 80 冊、膠州図書館洋書 347 冊、計 427 冊が配布される予定になっていた。現在 245 冊が確認されている。なお、これらの書籍は「旧制松校図書洋書」として集中配架されている。また、『旧制松本高等学校ドイツ語図書目録』の中に蔵書目録が掲載されている<sup>48</sup>。「図書原簿」によれば、寄贈受け入れは 1922 年（大正 11 年）7 月 25 日付けである。

#### <金沢大学>

金沢大学の前身である第四高等学校には、「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書 80 冊、膠州図書館書 308 冊、計 388 冊が分配される予定であった。しかし、金沢大学図書館に残されている『鹵獲書籍及図面目録』の表紙に残されている記述によれば、実際に寄贈されたのは官有洋書 65 冊、膠州図書館洋書 292 冊、計 357 冊であった。『鹵獲書籍及図面目録』には「送付書籍ニハ其ノ番号ニ赤ノ傍線ヲ附シタリ」とあり、具体的な寄贈図書名が同定できるので、『鹵獲書籍追加目録』（大正九年三月）および『鹵獲書籍目録訂正表』、『膠州図書館蔵書目録 補遺』を含めると、青島守備軍からどの書籍が寄贈されたか、青島守備軍の側から確認することができる。すでに論者の手による蔵書目録が公刊されているが<sup>49</sup>、現存冊数は 354 冊である。これらの書籍は、1922 年（大正 11 年）7 月 27 日付で青島守備軍から寄贈されている。また、「青島文庫」として集中配架されている。

#### <京都大学>

京都大学の前身である京都帝国大学には、「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、ドイツ公官庁洋書 1,308 冊、徳華学堂漢書 1,448 冊、膠州図書館洋書 1,457 冊、合計 4,213 冊が分配予定だったが、現在、附属図書館で 1,621 冊（洋書のみ）が見つかっている（混配）。青島守備軍によって添付された『鹵獲書籍及図面目録』も残っているものの、表紙が欠けているので、実際何冊が送られたのかは不明である。また、同じく京都大学の前身であった第三高等学校には、「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書 84 冊、膠州図書館洋書 321 冊、計 405 冊が分配予定であった。第三高等学校宛の『鹵獲書籍及図面目録』も残存しており、そこには「官有洋書一〇〇冊 膠州図書館洋書三一六冊 計四一六冊」と記されている。現在その中の 405 冊が確認され、総合人間学部の図書館に集中配架されている。ただし、京都帝国大学に関しては、配布予定数と比較して現存の冊数がかなり少ないので、今後も鹵獲書籍が見つかる可能性が高く、現在調査を続行しているところである。

<sup>48</sup> 「旧松本高等学校ドイツ語図書Ⅲ ー青島守備軍司令部寄贈図書ー」

<sup>49</sup> 志村恵：『金沢大学中央図書館所蔵「青島文庫」蔵書目録（1）（2）』

#### <愛媛大学><sup>50</sup>

1920年（大正9年）7月9日付けで松山高等学校校長の由比質から陸軍省へ嘆願書が提出された。これは、1919年設立の松山高校の図書の充実を図るべく書かれたものであった。その甲斐あってか、愛媛大学の前身である松山高等学校には、当初計画の「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書71冊、膠州図書館洋書452冊、計523冊の分配が予定された。2000年に行った予備調査に対する回答によると、「図書原簿」には384冊が“Headquarters of Tsingtao”から寄贈されたとあるが、そのうち何冊が現存しているかは不明ということである。

#### <山口大学>

山口大学の前身である山口高等学校には、「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書153冊、膠州図書館洋書380冊、計533冊が分配される予定であったが、現存しているのは223冊である。これらの書籍は、「物品出納簿」によると、1922年（大正11年）7月20日、1923年（大正12年）3月21日および1926年（大正15年）1月11日に受け入れ登録がなされている。

#### <九州大学>

九州大学の前身である九州工科医科大学には、「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書82冊、膠州図書館洋書174冊、計256冊が配布予定であった。現在、107冊が確認されている。しかし、1927年（昭和2年）に登録された一部の書籍を除いて、当時受け入れ手続きがなされなかったものが多数存在する。これは、第一次世界大戦のドイツからの賠償金で購入した「バルト文庫」<sup>51</sup>の登録を優先したためと想像される。また、九州大学図書館には『鹵獲書籍及図面目録』が残っているが、東北大学、金沢大学、京都大学のものとは異なり、表紙には何も記載がなく、そして受け入れ記録もはっきりしないので、九州工科医科大学に実際何冊分配されたかは不明である。

#### <佐賀大学>

佐賀大学の前身である佐賀高等学校は1920年（大正9年）に設立されたが、山形高等学校および水戸高等学校と同様に、「鹵獲書籍寄贈分配表修正案」において、「他ノ高等学校ト同一程度ノ配分」するよう示されている。しかし、具体的に何冊配分される予定だったかは不明である。ただし、青島守備軍参謀部編纂の『膠州図書館目録 補遺』には、配

<sup>50</sup> 愛媛大学については森孝明氏の前述論文を参照のこと。

<sup>51</sup> 同様の賠償金による購入本には、たとえば法務省法務図書館所蔵の「独賠」書籍などがある。賠償金による書籍購入の指示については、外務省外交資料館蔵「大正十四年五月 帝国ノ賠償実物取得1件（別冊）雑ノ部」（2門3類1項135・4号）を参照。

分予定の13冊のタイトルが記載されている。現在のところ48冊の鹵獲書籍が確認されているが、これらは1925年（大正14年）3月5日付けで登録されている。「旧制佐高」の請求番号でも検索が可能である。

#### <防衛大学校>

防衛大学校は、1952年（昭和27年）保安庁の附属機関として「保安大学校」の名称で設置され、その後の1954年、防衛庁設置法の施行とともに「防衛大学校」に改名された。防衛大学校は、第二次世界大戦後にできた組織であるので、直接鹵獲書籍の分配はなかった。しかし、陸軍予科士官学校に所蔵されていた書籍が県立埼玉図書館を経由し<sup>52</sup>、また陸軍経理学校の所蔵本が一橋大学を経由して防衛大学校に移管されている。なお陸軍予科士官学校からの書籍は、1960年（昭和35年）4月25日と6月21日付けで登録されている。現在144冊が確認されている。それらの書籍の最初の被分配機関は、蔵書印から推察すると、陸軍士官学校、陸軍予科士官学校、陸軍中央幼年学校および陸軍経理学校と思われる。

#### <海上保安大学校>

海上保安大学校は、1951年（昭和26年）4月に海上保安庁の附属機関として設置された。図書館機能の充実のため、同年12月に日比谷図書館（現東京都立日比谷図書館）に移管されていた海軍大学校の旧蔵書を保安庁（後の防衛庁）と二分割する形で譲り受けたという<sup>53</sup>。海軍大学校を経由して同校に所蔵されている鹵獲書籍は54冊確認されている。

#### <海上自衛隊第一術科学校>

海上自衛隊第一術科学校は、広島県江田島の海軍兵学校の跡地に設置されている。同校には「海上保安大学校図書館から移管した元海軍教育図書目録」があり、それによると総計4,788冊が海上保安大学校から移管されたことになっている。現在のところ、青島からの鹵獲書籍は10冊のみ確認されている。これらのうちの3冊の最初の被分配機関は、軍令部第三班で、1920年（大正9年）7月20日受領となっている。軍令部とは海軍軍令部、第三班は当時「列国軍事調査及関連事項」等と「編纂及戦史」等の担当部署であった<sup>54</sup>。

#### <昭和館>

1999年3月に開館した昭和館の図書館には、海軍の諸機関から引き継がれた膨大な書籍が所蔵されている。それらは財団法人史料調査会が昭和館の開館時に寄託したもので、

<sup>52</sup> 埼玉図書館の経路が確認できないものもある。

<sup>53</sup> 海上保安大学校図書館ホームページ「旧海軍大学校図書」による（<http://www.jcga.ac.jp/>）。

<sup>54</sup> 坂本正器・福川秀樹（編）『日本海軍編制事典』芙蓉書房、2003年、34頁。

海軍文庫、海軍大学校の旧所蔵本もそこに含まれる。海軍大学校には、「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書 446 冊、膠州図書館洋書 237 冊、計 683 冊が分配される予定であった。現在のところ、1926 年（大正 15 年）6 月 29 日に海軍省文庫から海軍大学校に寄贈された 1 冊のみが確認されている（旧徳華高等学堂所蔵本）が、昭和館の調査は始まったばかりである。

#### <法務省図書館>

法務省の前身である司法省には、1915 年（大正 4 年）5 月の「欧発第 840 号 鹵獲図書送付ノ件」に対する回答（青副庶第 19 号）<sup>55</sup>に 187 冊<sup>56</sup>を寄贈する旨が記載されている。司法省を引き継いだ法務省の法務図書館に 121 冊が現存している（混配）。これらの書籍は重複本のない書籍であり、同図書館に重複本がある場合は、その鹵獲書籍は現存していない。

#### <外務省図書館>

外務省には、「鹵獲書籍寄贈分配表」によれば、公官庁洋書 5 冊、膠州図書館洋書 393 冊、計 398 冊が配布予定であった。また、『膠州図書館目録 補遺』には、外務省へ配布予定の 54 冊のタイトルが挙げられている。そのうちの 30 冊は実際に 1934 年発行の『外務省図書目録』<sup>57</sup>に掲載されている。現物を確認できないので、これらの書籍が全て青島鹵獲書籍であるとは断定できないが、少なくとも当初計画で配布予定だった書籍のかなりの部分が、外務省に送られたと想像できる。しかし、外務省は戦後、大幅な図書の整理を実施し、その結果、旧外務省から受け継いだ書籍のうち現在の外務省図書館が所蔵しているものは 19,000 冊に過ぎないという。そして、現在のところ確認できた青島鹵獲書籍は 3 冊のみである。ところで、その 3 冊はすべて旧膠州図書館蔵書にもかかわらず、『膠州図書館目録 補遺』に掲載されていない。したがって、『膠州図書館目録 補遺』に掲載された 54 冊の他にも、青島鹵獲書籍が外務省に配布されたことは確実である。

#### <福島図書館研究所>

福島図書館研究所には、現在、12 冊の青島鹵獲書籍が所蔵されている<sup>58</sup>。そのうちの 3 冊は、前述の通り、『膠州図書館目録 補遺』において山形高等学校に配布予定として記載されている旧膠州図書館所蔵の書籍である。もし、これらの 12 冊が全て山形高等学校の旧

<sup>55</sup> 防衛研究所蔵『陸軍省大日記類欧受大日記大正 8 年 T8-6』に収録。

<sup>56</sup> 目録には 204 冊が挙げられているが、「此分ハ送ラス」と修正があり、チェックの入った書籍は実際に送られなかったようである。

<sup>57</sup> 外務省（編）『外務省図書目録』（Catalogue of the Library of the Department of Foreign Affairs）1934 年。

<sup>58</sup> 渡邊武房『鹵獲図書 12 冊』

蔵書であるなら、山形高等学校に分配され、なおかつ現存している鹵獲書籍の総計は 120 冊ということになる。

## まとめ

以上のように、青島で旧日本軍が鹵獲した書籍は、現在全国 25 箇所の機関において保存されている。しかし、書籍のリストアップとその由来の確認作業は緒についたばかりである。特に、軍関係については未だよくわかっていない部分が多く、なおも調査が必要である。すなわち、一橋大学から多くの書籍が移管されたとされる陸上自衛隊業務学校、陸軍軍医学校の書籍が移管されたとされる陸上自衛隊衛生学校、陸軍大学校の書籍が移管されたとされる陸上自衛隊幹部学校<sup>59</sup>、あるいは防衛庁図書館などの調査が待たれる。また、鹵獲書籍が未確認の帝国図書館の後続機関である国立国会図書館、大蔵省を引き継いだ財務省など国の機関の調査も必要である。そして当然ながら、鹵獲書籍の最大の分配先であった東京大学（東京帝国大学および第一高等学校）の本格的調査なくしては青島鹵獲書籍の全貌の把握は不可能である。

## <謝辞>

本調査の実施にあたっては、関係機関の職員、特に図書館職員の方々にいろいろと協力していただきました。心からお礼を申し上げます。

---

<sup>59</sup> 大東亜戦争研究会のホームページによる。